

地誌を極める！ オーストラリア編

昭和学院中・高等学校 西岡 陽子

地理の授業にあたって

最近の尖閣諸島問題とそれに続く状況を見ると、隣国とのつきあいの難しさを感じざるを得ないが、地道に相手の国への理解を続けなければならない。つい先日、電車で乗り合わせた中国人の2人づれに、成田空港への電車を案内して大変に感謝された。ささやかでも草の根の友好を積み上げていくしかないのだと思う。

ウォーミングアップ！

正式名称は、「オーストラリア連邦」で、国旗にユニオンジャックがついているように、イギリス連邦の一員をなす。独立時、六つの植民地が連邦として、イギリス議会の承認のもと、平和裏に独立した事情を物語る（国旗左下の大きな星は、当初六州をあらわす六稜星であったが、今ではノーザンテリトリーも含む七稜星となっている。右側の五つの星は、おもに南半球でみられる南十字星を表している）。イギリス国王を元首とする立憲君主制の国家で、憲法では連邦総督がイギリス連邦共通の元首イギリス国王の代行を勤めるが、慣例で連邦総督が下院の第1党の党首を首相に任命し、その首相を中心とする内閣が執行権をもつ。1984年に、それまでイギリスと同じだった国歌を、国民に親しまれていた歌に変更した。1999年には立憲君主制から共和制への変更を問う国民投票も行われたが、直接民主制案でなく、議会による大統領選出案であったため、中途半端な民主制を嫌った国民が多く共和制への変更は否決された。なお、オーストラリアという名称は「未知の南方大陸」を意味するラテン語「テラ・アウストラリス・インコグニタ」からとられた。

オーストラリアの地形は、ほとんどが安定陸塊からなり、最大の山脈もなだらかな古期造山帯である。最高峰は2000mを越え、冬には雪をいただき、その雪どけ水が耕地を潤すものの、面積は日本の20倍と広く、国土のほとんどが乾燥地帯であるため、人の住めない不毛の地が広大にひろがる。

地名表記は、近年現地読みにする傾向にある。大分水嶺山脈はグレートディヴァイディング山脈へ、大讃井盆地がグレートアーテジアン盆地へという具合である。これは当然であるが、生徒に意味を教えると覚え

やすい。カタカナ表記について、教科書や地図帳と少しでも違ったら×になるのか、という問いがある。カタカナは、現地の発音を日本人が表現したものだから慣例にすぎない。かつてマーレー川といていたが、現在はマリー川である。また、Vをヴと表記する場合とブの場合がある。本来日本語にはバ行しかないわけだからブでもかまわない。デとディも同様、小文字のア行は本来ないので使わない場合もある。

オーストラリアは、地下資源に大変恵まれており、生産高が5位以内の鉱物資源は、金、銀、銅、コバルト鉱などがあげられる。世界最大の鉱業国といわれるゆえんである。この国は「羊の背に乗る国」「ラッキーカントリー」「アジア太平洋国家」などとよばれてきた。「羊の…」はイギリスへの輸出品であった羊毛が国の経済を支えた第二次世界大戦までの期間をさし、「ラッキー…」はその後、羊毛が化学繊維におされ需要が減退した時期に、発見された鉱物資源を日本に輸出して経済を支えた時期である。「アジア…」は、1970年代以降のイギリスの経済的凋落とEU加盟で、アジアの多方面に目を向けざるを得なくなった時期である。

ステップアップ！

オーストラリアは乾燥した大陸である。年降水量分布図を日本と比較すればよくわかる（たとえば『新詳高等地図』p.111では、日本はほぼ全域が年降水量1000mm以上の地域に含まれる）。オーストラリア全体の人口密度は1km²あたり2人強だが、人口は、居住環境のよい東から南にかけての沿岸地域、とくに人口100万以上の5都市に全人口の60%が集中している。これらは独立時の州都である。なお、首都のキャンベラはここに含まれない。首都を決める際、植民地支配開始の地であるシドニーか、当時政治や産業の中心地であったメルボルンか決定できず、ほぼ中間地の高原上に新たに首都を建設し、「キャンベラ」（アボリジニーの言葉で「出会いの場所」の意）とした。

先住民は「アボリジニー」とよばれてきたが、英語の「アボリジニー」は通常、先住民、土着民の意味で、差別的な意味合いが強いことから最近では「アボリジナル」や「アボリジナルの人々」とよぶ動きもあるそ

うだ。ヨーロッパ人と初めて接触した当時、30万人(75万人という説もある)いたといわれていたが、1901年の調査では約6万人に激減していた。ヨーロッパ人に「害獣」として殺されただけでなく、もち込まれた病気による犠牲者も少なくなかった。1920年代になると、政府のとった保護、隔離政策(つまり慈善事業の対象)、混血児の同化政策のため、徐々に数は回復したが、ほかの国民と同じ選挙権の獲得には1984年まで待たねばならなかった。アボリジニーに対し政府が公式謝罪を行ったのは2008年のことである。2008年のシドニーオリンピックでは、アボリジニーのキャシー・フリーマンが聖火リレー最終走者を務めた。彼女が400m走で優勝し、アボリジニーとオーストラリアの二つの旗を掲げてウィニングランをしたのは話題をよんだ。

オーストラリアは当初囚人の流刑地であった。それまでアメリカに送っていたが、アメリカの独立で送れなくなったからである。囚人といっても約8割は窃盗犯でそれも初犯であったといわれている。また、労働運動や社会運動に参加した活動家も流刑となった。囚人を労働力に植民地建設を行ったのである。労働力不足が深刻であったオーストラリアでは、中国人やインド人の低賃金労働者を大量に導入した。中国人はよく働き、贅沢することもなく稼ぎを本国に送金した。ヨーロッパ人はそのような彼らに反感をもった。1901年の移民制限法には「好ましくない人物の移住を制限する」とあるだけで「中国人など非白人の移住を禁止する」と書かれているわけではない。ただ移住希望者には、ヨーロッパ系言語で50単語を書きとるテストがあり、アジア人などは全員が不合格となった。第二次大戦後は、白豪主義よりも経済発展が優先され、門戸は広く開かれた。移住者には、無料の英語講習や、通訳などの手だてがとられる。24時間対応の電話相談もある。ラジオの外国語放送も68言語週296時間に及ぶ。移民たちは同じ出身国同士助け合い、メルボルン最大の市場では、たとえば魚はギリシャ系、ハム・ソーセージ・チーズはドイツ系、果物はスペイン系の人々が多く経営している。オーストラリア人の4人に1人は、外国生まれで、その6割以上が英語圏以外といわれる。オーストラリア生まれでも、3割は両親または片方の親が外国生まれだという。国の数は、150にもわたるそうだ。

ジャンプアップ!

オーストラリアは先進国では珍しく、鉱物資源や農

産物など一次産品の輸出に依存している国である。

日本にとっては、高度経済成長の間、また現在まで資源供給地としてのオーストラリアの役割は大きい。工業製品の市場としても重要である。オーストラリアにとっても、それまで依存度の大きかったイギリスが1973年にEUに加盟して以降、日本は一貫して第1位の輸出相手国である(貿易総額ではつい最近中国に抜かれた)。貿易内容では牛肉の輸入も多い。とくにアメリカでBSEが発生した年には90%近くがオーストラリア牛で、スーパーでは「オージービーフ(オージーは「オーストラリア人」の短縮形)」のラベルが目立った。

日本語学習熱は、1980年代後半から高まり、背景には日本との経済関係の深まりがある。政府が1994年、アジアの言語の学習を奨励し、中国語、韓国語、インドネシア語とともに日本語も小学校教育に導入することを勧告したのも大きい。2001年、12年生(日本での高校3年生にあたる)が学ぶ外国語の中で日本語は22%を占め、フランス語、中国語をおさえトップにたっている。国全体の日本語学習者は約35万人で、韓国での学習者、中国での学習者に次いで3番目に多いが、人口比で見ると約55人に1人となり圧倒的に第1位を占める。近年の北海道へのオーストラリア人のスキー客増加は特筆すべきである。夏にスキーができることに加え、雪質がよいことが噂になり、今では長期滞在者も増え、倶知安町のひらふ地区は「オージー村」といわれているほどである。他方、日本からオーストラリアへの観光客数は近年第1位になったという見解もある。日本人が感じる魅力の中には、ここでしか見ることのできないカンガルーなどの動植物も含まれるであろう。長い間、他の大陸から孤立していたため、固有の種が保存されたのである。

第二次世界大戦では、敵味方となって戦い、日本軍の捕虜になったオーストラリア人に犠牲者が多数でたことや、カウラ収容所から日本人捕虜が脱走を企て多数の死者がでたことなど、不幸な時期はあったものの、その後双方の国の努力で友好関係を築いてきた。オーストラリアは、アジア環太平洋地域の一員として、この地域との関係を今後も強めていくであろう。

■参考文献

- 1 竹田いさみ・森健・永野隆行編『オーストラリア入門 第2版』2007 東京大学出版会
- 2 石出法太・石出みどり『これならわかるオーストラリア・ニュージーランドの歴史Q&A』2009 大月書店
- 3 「オーストラリア発見」<http://discover.australia.or.jp/index.html>